

# グローバル経済危機時の経済予測—誤差はなぜ生じたか

跡見学園女子大学

山澤成康

## 要旨

ナイトは、リスクと不確実性を明確に分け、起こりうることの確率分布すらわからない場合を不確実性と呼んだ (Knight(1921))。そして、不確実性に対しては、統計学は無力であり、統計学的な予測は不可能だと考えた。2008年度予測はまさに不確実性下の予測だった。経済予測機関はその時どのような行動をとったのかを検証する。

2008年度予測は実質GDP成長率でみると、史上最大の誤差が生じた。2008年度予測が大幅な誤差を出したのは、楽観的な現状認識を持っていたうえ、起こりうる危機のマイナス面を過小評価していたことが原因だ。判断が楽観的だったのは、景気減速を示す指標があったにもかかわらず、生産、輸出といった景気に大きな影響を与える変数が好調さを示していたためだ。景気動向指数も、機能しなかった。予測機関の予測行動としては、横並び傾向が顕著にみられ、保守的なバイアスなども観察される。

標準的な予測では、景気の拡大が続くと予測した予測機関も、米国の景気後退リスクは認識していた。しかし、リスクが起こった場合の日本経済への影響を過小評価していた。また、株価の情報を使っていたかどうかについて効率性の検定を行うと、過去の予測には株価の情報を予測に十分役立てていないことがわかった。

2008年度予測に関しては、専門家の予測よりも非専門家の予測の方が精度が高く、多様な主体による予測の必要性も明らかになった。

予測行動として改善すべき点としては、危機に対応した予測手法の開発、長期的な景気の先行指標の開発、横並び傾向を改善するための予測の多様性の確保などが挙げられる。